

『環海異聞』より

著者	石川 榮吉
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	59
ページ	83-84
発行年	2006-02-24
URL	http://doi.org/10.15021/00001610

9 『環海異聞』より

40年余りも昔のことになるが、昭和37（1962）年、私はポリネシアの東の涯のマルケサス諸島にいた。そこは、タヒチ島の北東およそ1600キロメートルの南太平洋上に浮かぶ、小さな火山島群で、いまでこそタヒチから週一便の定期空路も開かれているが、当時はほぼ月に1回、島々への物資補給とコブラの集荷のためにタヒチから訪れてくる、300トンばかりの貨物船に便乗するほか、島へ渡る手だてのない、文字通りの絶海の孤島であった。その貨物船も、10日間ほどを費やして、やっと辿り着くのである。

パリを逃れてタヒチに渡ったゴーギャンが、そのタヒチにも失望して最後に着いた先がマルケサスであった。ハーマン・メルビルは、捕鯨船の水夫をしていた若年のころ、マルケサスで船を脱走し、当時まだ食人慣習をもっていた島民のあいだに身を潜めた。そのおりの異常な体験から作品『タイピー』が生まれた。だから、美術史やアメリカ文学史に詳しいかたならば、あるいはマルケサス諸島の名をご存知かもしれないが、まずおおかたの日本人にとって、マルケサスは馴染みのない名であろう。もちろん、ここを訪れる日本人は、いまでも稀も稀、皆無に近い。私がここにやって来たのは、人類学の仕事のためであったが、そのときの私は、自分を、マルケサスを訪れた最初の日本人であり、ましてやマルケサス島民について記録する日本人は、自分が最初であろうと信じて疑わなかった。

ところが、先駆者がいたのである。それも文化元（1804）年という、思いもよらぬ古い時代にであった。仙台藩領石巻船籍の若宮丸の水主津太夫ら4名の船乗りがそれである。彼らは寛政5（1793）年江戸へ回漕中を漂流に陥り、やがてアリューシャン列島に漂着、ロシア人の手でシベリア、ヨーロッパロシアを経てペテルブルクに送られる。ペテルブルク到着は享和3（1803）年のことであった。折よく、日本との通商を求めて遣日使節レザノフが派遣されることとなり、その乗艦に日本人漂流民を便乗させて送還する運びとなる。ただし、当初若宮丸乗組16名中、これまでに3名病死、9名がロシア残留を希望し、結局帰国の途についたのは津太夫ら4名だけであった。艦は大西洋、太平洋の両洋を横断して、文化元年長崎に入港する。津太夫らは10年余の歳月をかけて、はからずも日本人として初めて世界一周をはたしたわけである。この太平洋横断中に、マルケサス諸島に約2週間、ハワイ島に数日間立寄ったことにより、彼らは記録に残るかぎりでもポリネシアを見た最初の日本人ともなったのである。

私がこの事実を知ったのは、マルケサスから帰ってのち、偶然の機会に『環海異聞』（文化4年 1807年）を閲読したことによる。この書は、仙台藩の蘭学者大槻玄沢が、津太夫らからその見聞談を聞き取り、当時入手可能な蘭書などの他資料と照合・校訂を施したうえで、藩公に献呈されたものである。全15巻より成るうち、第13巻にマルケサスおよびハワイ関係の記録が収められている。そこには、津太夫らが直接目にした島民の姿と、彼らの風俗習慣が、生き生きとえがかれており、期せずして貴重な人類学資料とな

っている。これを発見した私のショックと感動は大きかった。

従来『環海異聞』は、大黒屋光太夫のロシア漂流談を桂川甫周がまとめた『北槎聞略』（寛政6年 1794年）などと並んで、日本人の見聞にもとづく18世紀のロシア事情書としてのみ評価されるのが常であり、マルケサスやハワイ関係記事を取り上げた研究者はただの一人もいなかった。たしかに、『環海異聞』の大半がロシア記事にあてられていることは事実であるが、記述量は少ないにせよ、マルケサスとハワイについての貴重な記述のあることも無視されてはならない。私はマルケサスの人類学の最初の日本人記述者にはなりそこなったが、これまで一人として注目することのなかった、『環海異聞』のポリネシア人類学上の価値を発掘したことで、いまはしごく満足しているのである。